



Title	永禄・元亀年間における足利義昭と近臣
Author(s)	山田, 雄翔
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2022, 6, p. 47-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89322
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

永禄・元亀年間ににおける足利義昭と近臣

日本史学 博士前期課程 1 年

山田 雄翔

はじめに

永禄 11 年（1568）9 月、足利義昭¹は織田信長を中心とする軍勢とともに上洛し、畿内を平定した。そして翌月、義昭は征夷大将軍への就任を果たす。これ以降、元亀 4 年（1573）7 月に織田信長によって京都を逐われるまで、義昭は 5 年弱にわたって京都を中心に幕府による支配を展開した。本稿では、この永禄 11 年（1568）10 月から元亀 4 年（1573）7 月までを「義昭期」²として、義昭期幕府の構造について一試案を提示することを目標にする。

義昭期幕府は、織田信長による傀儡政権であると戦前から長らく理解されてきた³。これは、天下統一を目指す織田信長に、義昭は利用されたに過ぎないとする見解である。しかし、近年では織田信長に関する研究や戦国期の室町幕府に関する研究が進展したことにより、上記の見解に対して見直しが進んでいる。このような研究状況の中で、義昭期幕府研究の一つの画期となったのが、久野雅司氏による研究である。久野氏は京都支配の実態について検討し、当該期の政権は義昭期幕府と織田信長が相互に補完する「二重政権」であったと論じた⁴。現在では、この「二重政権論」の妥当性を評価するにあたって、義昭期幕府の内実を問う研究が盛んになっている。

本稿で取り上げる義昭の近臣層に関しては、川元奈々氏による研究がある。川元氏は、義昭期の幕臣を総体的に検討した。そして、義昭の政治的意思を伝える文書を発給した幕臣を「側近中の側近」として把握し、彼らが幕府の中核を担っていたと論じた⁵。しかし、この研究では、これらの近臣集団がいつ形成されたのか、「側近中の側近」以外の義昭近臣が幕府においていかなる役割を担ったのかということが明らかになっていない。そこで本稿では、近臣層の形成過程を明らかにするために、上洛以前の段階から義昭と近臣層の動向に注目する。そして、幅広く近臣の活動をとらえるために、義昭の出

¹ 足利義昭は度々改名しているが、本稿では統一して「義昭」と表記する。

² 織田信長により京都を逐われた後にも、義昭のもつ影響力から依然として幕府は存続していたとする見解があるが（藤田達生「『覇幕府』論」（『芸備地方史研究』268・269 合併号、2010 年）など）、少なくとも京都退座以降に義昭の権力は変質していたと考えられることから、本稿では元亀 4 年（1573）7 月以降を対象としない。

³ 奥野高広『足利義昭』（吉川弘文館、1960 年）など。

⁴ 久野雅司「京都支配における足利義昭政権と織田信長政権」（同著『織田信長政権の権力構造』戎光祥出版、2019 年、初出 2003 年）。

⁵ 川元奈々「将軍足利義昭期における幕府構造の研究—奉公衆を中心として—」（久野雅司編著『シリーズ・室町幕府の研究 第二巻 足利義昭』戎光祥出版、2015 年、初出 2010 年）。以下、川元氏の論はすべて本論文による。

行を検討の対象とする。貴人の出行にはその近臣が供奉するのが一般的であり、義昭もその例に漏れない。義昭の出行に供奉する近臣を取り上げることで、「側近中の側近」以外の近臣の活動をとらえることができよう。

第1章 上洛以前における近臣層の編成

永禄8年(1565)5月19日に、義昭の兄である將軍足利義輝が、三好氏の襲撃を受けて殺害された。この事件を永禄の変という。義輝の死亡により、当時一乗院に入室して僧となっていた義昭は、次期將軍候補と目されるようになったのである。

永禄の変の後、義昭は南都を脱して、同年7月には近江国甲賀郡和田に、11月には近江国野洲郡矢島に移った。この移座に関して、義昭は義輝旧臣であった一色藤長と細川藤孝に、その忠節に謝意を示す感状を発給している⁶。すなわち、義昭には南都脱出時点から幕臣がつき従っていたのである。

久野氏は、矢島滞在段階の前後に大館晴忠、三淵藤英、沼田統兼ら幕臣が義昭のもとに参集し、彼らが義昭の最初期の家臣であったと述べている⁷。これらの幕臣の多くも、義輝の旧臣であった。しかし、久野氏が根拠とした『足利季世記』⁸という史料は軍記物であり、同時代に書かれた記録ではないことには注意を要する。ここでは、この頃に義昭のもとに多くの幕臣が参集したということのみを想定しておきたい。

矢島から上洛の機会を窺っていた義昭であったが、永禄9年(1566)8月に近江の大名六角氏が三好氏と通じたことで矢島を退き、若狭国を経て9月には越前国に移った。これ以降上洛を迎えるまで、義昭は越前大名朝倉義景の庇護を受けることになる。

義昭の出行が史料上みえるようになるのは、この越前滞在段階である。ここでは特に、永禄11年(1568)5月17日の朝倉義景邸御成をみていきたい。この御成には「朝倉亭御成記」⁹という儀式次第をまとめた記録が残されており、これによって義昭に供奉した近臣の活動を確認することができる。

「朝倉亭御成記」でまず注目されるのは、「其外御供衆、御部屋衆、申次、番方衆、右筆方、悉御成以前伺候申也」という記述である。この時点までに、義昭は参集した幕臣を「御供衆」「御部屋衆」といった幕府の役職に編成していたのである。これに関連するのが、「永禄六年諸役人附」¹⁰(以下、「諸役人附」という史料である。「諸役人附」は前半部と後半部に分かれ、前半部には義輝段階の幕府の、後半部には義昭期幕府の中心的な役職とそれを担う幕臣の名前が列挙されている¹¹。そして、後半部の成立は越前

⁶ (永禄9年(1569))4月24日付足利義昭御内書(『国立国会図書館所蔵貴重書解題』第十卷(書簡の部・第一))。

⁷ 久野雅司『足利義昭と織田信長—傀儡政権の虚像—』(戎光祥出版、2017年)。

⁸ 『(改定)史籍集覧』13。

⁹ 『群書類従』22輯。

¹⁰ 『群書類従』29輯。

¹¹ 長節子「所謂「永禄六年諸役人附」について」(『史学文学』4-1、1962年)、黒嶋敏

滞在段階ではあるが、義昭上洛以降にもその枠組みが引き継がれたことが川元氏によって指摘されている。「朝倉亭御成記」の記述を踏まえると、「諸役人附」は役職編成の構想ではなく、越前滞在段階の幕臣の実態にもとづいて成立しており、上洛後に京都支配を展開する義昭期幕府の素地が、この段階で整えられていたと考えられる。

次に、具体的に朝倉邸への義昭の御成に供奉した幕臣をみていく。「朝倉亭御成記」には義昭に供奉した「御供衆」として、上野信忠、一色晴家、一色藤長、武田信堅、大館晴忠、万阿がみえる。同朋衆である万阿を除いた5人は、「諸役人附」に「御供衆」として記載されている人物と一致する。御供衆とは、文字通り將軍の出行に御供する役職・家格のことである¹²。義昭に御供する役目は、その役職通り「御供衆」の幕臣が担っていた。ここからも、「諸役人附」が越前滞在段階における幕臣の役職編成を反映していることが確認できる。

第2章 義昭期幕府における

第2章では、上洛以降の義昭の出行に注目し、義昭期幕府の構造を検討する。【表】は前述の「朝倉亭御成記」と公家山科言継の日記である『言継卿記』から、義昭の出行に供奉した「御供衆」を表にまとめたものである。

【表】 義昭の出行に供奉した「御供衆」一覧

	「側近中の側近」	朝倉亭御成 (永禄11/5/17)	参内 (永禄11/10/22)	参内 (永禄12/2/26)	参内 (永禄13/2/2)	義輝法要 (元亀2/5/19)
一色播磨守晴家		○				
一色式部少輔藤長	○	○	○			
伊勢三郎貞興			(非御供、着烏帽子、車寄之北に祇候、同名上野介後見也)	(幼少之時非御供、只烏帽子にて祇候也)	○	○
上野陸奥守(佐渡守) 信忠(恵)	○	○	○			○
上野中務大輔秀政	○		○			
上野紀伊守豪為				○		
大館伊予守晴忠		○				
大館左衛門佐昭長	○			○		
武田治部少輔信堅		○				
細川右馬頭藤賢			○	○	○	○
細川兵部大輔藤孝	○		○		○	
三淵弥四郎秋豪			○			
和田伊賀守惟政	○		○			

注(1): 本表は「朝倉亭御成記」(『群書類従』22輯)と『言継卿記』にみえる義昭の出行に供奉した「御供衆」をまとめたものである。

注(2): 「側近中の側近」とは義昭期幕府の中核を担った近臣であり、川元奈々氏により示された。

「足利義昭の政権構想―「光源院殿御代当参衆并足輕以下衆覚」を読む―」(同著『中世の権力と列島』高志書院、2012年、初出2004)。

¹² 二木謙一「室町幕府御供衆」(同著『中世武家儀礼の研究』吉川弘文館、1985年、初出1983年)。

まず【表】をみて、上洛以降の出行すべてに細川藤賢が供奉しているという点に気が付く。藤賢は、義昭上洛以降に、義昭のもとに参集した。注目すべきは、藤賢が細川典厩家の出身ということである。典厩家は代々御供衆を勤め、さらに將軍の出行の供奉において限られた家柄の者しか勤めることができない御剣役を担う家であった。すなわち、義昭上洛以降、藤賢は先例にしたがい、義昭出行の供奉の中心を担うようになったのである。一方で、義昭期幕府において藤賢による政治的文書の発給や義昭への取次といった活動は確認できない。藤賢は義昭の「側近中の側近」ではなかったのである。

次に、永禄 11 年（1568）10 月 22 日の初度の参内を境として、それ以降義昭の「側近中の側近」たちが出行に供奉しなくなるという点に注目したい。かわって、前述の細川藤賢と、典厩家のように御供衆を勤める家格の伊勢貞興の供奉が目立つようになる。上洛直後の参内時には、一色藤長、上野信忠、上野秀政、細川藤孝、和田惟政という「側近中の側近」たちが多数供奉している。これは、初めての参内に対する特別な処置であったのだろう。これ以降、上野信忠、大館昭長、細川藤孝の供奉もみられるが、彼らの供奉は藤賢や貞興のように恒例になっておらず、一回きりである。また、初度の参内以降、複数の「側近中の側近」が同一の出行に供奉するという事例もみられない。

以上から、義昭期幕府において、儀礼的な場で活動する近臣と政治的な場で活動する近臣に役割が分化していたのではないかという想定ができるのである。

むすびにかえて

本稿で検討したことをまとめつつ、今後の展望を述べる。

第 1 章では、上洛以前の段階における義昭の近臣層について検討し、越前滞在段階において義昭のもとに参集した幕臣が役職ごとに編成されていたと述べた。これが、上洛後の京都支配につながったのである。

第 2 章では、上洛後の段階における義昭期幕府の近臣層について、義昭の出行に注目して検討し、義昭期の幕府において近臣層は儀礼の場において活動する者と政治的な場で活動する者に分化していたのではないかという可能性を示した。

本稿では、出行時の供奉という限られた側面からの検討にとどまってしまい、義昭期の幕府構造を広く見通すことができなかった。今後はより多くの事例を収集することで、義昭期幕府の全体像を明らかにしていきたい。また、今回近臣層の分化という構造が、義昭期幕府に特有なものであるのか、あるいは戦国期の幕府に広くみられるものであるのかということも重要な問題であろう。あわせて、今後の課題としたい。